

蜜柑

芥川龍之介

青空文庫

或曇^{あもくも}つた冬^{ふゆ}の日暮^{ひぐれ}である。私は横須賀^{わたくしよこすか}發上^{はつじや}り二等客^{ふえ}車^まの隅^{すみ}に腰^{こし}を下^{おろ}して、ぼんやり發車^{はつじや}の笛^{ふえ}を待つてゐた。とうに電燈^{でんとう}のついた客車^{きやくしや}の中には、珍^{めづ}らしく私の外^{わたくしほか}に一人^{ひとり}も乗客^{じようきやく}はゐなかつた。外^{そと}を覗^{のぞ}くと、うす暗^{ぐら}いプラットフォオムにも、今日^{けふ}は珍^{めづ}らしく見送^{みおく}りの人影^{ひとかげ}さへ跡^{あと}を絶^たつて、唯^{ただ}、檻^{をり}に入^いれられた小犬^{こいぬ}が一匹^{びき}、時^{とき}時^{とき}悲^{かな}しさうに、吠^ほえ立ててゐた。これらはその時^{とき}の私の心^{こころ}もちと、不思議^{ふしぎ}な位^{くらゐ}似^につかはしい景色^{けしき}だつた。私の頭^{わたくめ}の中^{うち}には云^いひやうのない疲勞^{ひらう}と倦怠^{けんたい}とが、まるで雪曇^{ゆきぐも}りの空^{そら}のやうなどんよりした影^{かげ}を落^{おと}してゐた。私は外^{わたくしぐわいたう}套^{たう}のポケットへちつと兩手^{りやうて}をつつこんだ儘^{まま}、そこにはひつてゐる夕刊^{ゆふかん}を出^だ

して見ようと云ふ元氣さへ起らなかつた。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寛ぎを感じ

ながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずる

ずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまへてゐた。所

がそれよりも先にけたたましい日和下駄の音が、改札口の方か

ら聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何か云ひ罵る聲と共に

に、私の乗つてゐる二等室の戸ががらりと開いて十三四の小娘

が一人、慌しく中へはひつて來た。と同時に一つづしりと揺れて、

徐に汽車は動き出した。一本づつ眼をくぎつて行くプラットフオ

オムの柱、置き忘れたやうな運水車、それから車内の誰かに

祝儀の禮を云つてゐる赤帽——さう云ふすべては、窓へ吹きつ

ける煤煙ばいえんの中に、未練みれんがましく後うしろへ倒たふれて行いつた。私は漸わたくやうやくほ
 つとした心こころもちになつて、巻煙草まきたばこに火ひをつけながら、始はじめて懶ものうい
 睚まぶたをあけて、前まへの席せきに腰こしを下おろしてゐた小娘こむすめの顔かほを一瞥べつした。
 それは油氣あぶらけのない髪かみをひつつめの銀杏いんげん返しに結ゆつて、横よこな
 での痕あとのある鞆ひびだらけの兩頬りやうほほを氣持きもちの悪い程ほど赤あかく火照ほてらせた、
 如何いかにも田舎者ゐなかもものらしい娘むすめだつた。しかも垢あかじみた萌黄色もえぎいろの毛け
 糸いとの襟巻えりまきがだらりと垂たれ下さがつた膝ひざの上うへには、大きな風呂敷包おほふろしきづつみ
 があつた。その又包またづつみを抱だいた霜燒しもやけの手ての中なかには、三等とうの赤あかぎ
 切符きっぷが大事だいじさうにしつかり握にぎられてゐた。私はこの小娘こむすめの下げ
 品ひんな顔かほだちを好このまなかつた。それから彼女かのぢよの服裝ふくさうが不潔ふけつなの
 もやはり不快ふくわいだつた。最後さいごにその二等とうと三等とうとの區別くべつさへも辨わきま

へない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから巻煙草に火をつけた
私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云ふ心もちもあ
つて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。
すると其時夕刊の紙面に落ちてゐた外光が、突然電
燈の光に變つて、刷の悪い何欄かの活字が意外な位鮮に
私の眼の前へ浮んで來た。云ふ迄もなく汽車は今、横須賀線に多
い隧道の最初のそれへはひつたのである。
しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、
やはり私の憂鬱を慰むべく世間は餘りに平凡な出來事ばかり
で持ち切つてゐた。講和問題、新婦、新郎、流職事件、
死亡廣告——私は隧道へはひつた一瞬間、汽車の走つ

てゐる方向が逆になつたやうな錯覺を感じながら、それらの
 索漠とした記事から記事へ殆ど機械的に眼を通した。が、そ
 の間も勿論あの小娘が、恰も卑俗な現實を人間にしたや
 うな面もちで、私の前に坐つてゐる事を絶えず意識せずにはゐら
 れなかつた。この隧道の中の汽車と、この田舎者の小娘と、
 さうして又この平凡な記事に埋つてゐる夕刊と、——これが
 象徴でなくて何であらう。不可解な、下等な、退屈な人
 生の象徴でなくて何であらう。私は一切がくだらなくなつ
 て、読みかけた夕刊を抛り出すと、又窓枠に頭を寄せながら、
 死んだやうに眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたやう

な心もちがして、思はずあたりを見まはすと、何時の間にか例の
小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けようと
してゐる。が、重い硝子戸は中中思ふやうにあがらないらしい。
あの軋だらけの頬は愈、赤くなつて、時々鼻涙をすすりこむ音
が、小さな息の切れる聲と一しよに、せはしなく耳へはひつて來
る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに足るもの
には相違なかつた。しかし汽車が今將に隧道の口へさしかから
うとしてゐる事は、暮色の中に枯草ばかり明い兩側の山
腹が、間近く窓側に迫つて來たのでも、すぐに合點の行く事
であつた。にも關らずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸
を下さうとする、——その理由が私には呑みこめなかつた。いや、

それが私には、單にこの小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから私は腹の底に依然として險しい感情を蓄へながら、あの霜焼けの手が硝子戸を擡げようとして惡戰苦闘する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうぱたりと下へ落ちた。さうしてその四角な穴の中から、煤を溶したやうなすす黒い空氣が、俄に息苦しい煙になつて濛濛と車内へ漲り出した。元來咽喉を害してゐた私は、手巾を顔に當てる暇さへなく、この煙を滿面に浴びせられたおかげで、殆ど息もつけられない程咳きこまなければならな

かつた。が、小娘は私に頼著する氣色も見えず、窓から外
 へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戦がせなが
 ら、ぢつと汽車の進む方向を見やつてゐる。その姿を煤煙と
 電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明くなつて、
 そこから土の勻や枯草の勻や水の勻が冷かに流れこんで來な
 かつたなら、漸く咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごな
 しに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違な
 かつたのである。

しかし汽車はその時分には、もう安安と隧道を迂りぬけて、
 枯草の山と山との間に挟まれた、或貧しい町はづれの踏切りに
 通りかかつてゐた。踏切りの近くには、いづれも見すばらしい藁

屋根らやねや瓦屋根かはらやねがごみごみと狭苦せまくるしく建てこんで、踏切り番ふみきばんが
 振ふるのであらう、唯一ただ一りう旒しろうのうす白い旗はたものうが懶ぼしげに暮色よくを揺ゆつてゐ
 た。やつと隧道トンネルを出でたと思おもふ——その時ときその蕭索せうさくとした踏切ふみき
 りの柵さくの向むかうに、私はわたくし頬ほの赤あかい三人にんの男をとこの子こが、目白めじろ押おしに竝なら
 で立たつてゐるのを見みた。彼等かれらは皆みな、この曇天どんてんに押おしすくめられ
 たかと思おもふ程ほど、揃そろつて脊せいが低ひくかつた。さうして又またこの町まちはづれの
 陰慘いんさんたる風物ふうぶつと同じやうな色いろの著物きものを著きてゐた。それが汽車きしや
 の通とほるのを仰あふぎ見みながら、一齊せいに手てを舉あげるが早はやいか、いたいいけ
 な喉のどを高く反そらせて、何なんとも意味いみの分わからない喊聲かんせいを一生懸命しやうけんめい
 に進ほとばしらせた。するとその瞬しゆん間かんである。窓まどから半身はんしんを乗のり出だ
 してゐた例れいの娘むすめが、あの霜燒しもやけの手てをつとのばして、勢いきほひよく左右さいう

に振ふつたと思おもふと、忽たちまち心こころを躍をどらすばかり暖あたな日ひの色いろに染そまつて
 ゐる蜜柑みかんが凡およそ五いつつ六むつつ、汽車きしゃを見送みおくつた子供こどもたちの上うへへばらば
 らと空そらから降ふつて來きた。私わたしは思おもはず息いきを吞のんだ。さうして刹せつ那なに
 一切さいを了れう解かいした。小娘こむすめは、恐おそらくはこれから奉公ほうこう先さきへ赴おもむか
 うとしてゐる小娘こむすめは、その懷ふところに藏かくしてゐた幾顆いくくわの蜜柑みかんを窓まどか
 ら投なげて、わざわざ踏切ふみきりまで見送みおくりに來きた弟あとうたちの勞らうに報むくいた
 のである。

暮色ぼしよくを帶おびた町まちはづれの踏切ふみきりと、小鳥こどりのやうに聲こゑを擧あげた
 三人にんの子供こどもたちと、さうしてその上うへに亂落らんらくする鮮あざやかな蜜柑みかんの色いろと
 —すべては汽車きしゃの窓まどの外またたくまに、瞬またたくまく暇とほもなく通とほり過すぎた。が、私わたし
 の心こころの上うへには、切せつない程ほどはつきりと、この光景くわうけいが燒やきつけら

れた。さうしてそこから、或得體あるえたいの知れない朗ほがらかな心もちが湧わき上あがつて來くるのを意識いしきした。私は昂然わたくしかうぜんと頭あたまを擧あげて、まるで別人べつじんを見るやうにあの小娘こむすめを注視ちゆうしした。小娘こむすめは何時いつかもう私のまへまへせきかへ前の席せきに返かへつて、不相變あひかはらず鞆たづだらけの頬ほほを萌黄色もえぎいろの毛絲けいとの襟えりま巻きに埋うづめながら、大きおおな風呂敷包ふろしきづつみを抱かかへた手に、しつかりと三等切符とうぎつぷを握にぎつてゐる。……

私わたくしはこの時始ときはじめて、云いひやうのない疲勞ひらうと倦怠けんたいとを、さうしまたふかかい又不可解かとうな、下等たいくつな、退屈じんせいな人生わづかを僅ことに忘れる事が出來できたのである。

(大正八年四月作)

青空文庫情報

底本：「現代日本文學全集 第三〇篇 芥川龍之介集」改造社

1928（昭和3）年1月9日発行

初出：「新潮」

1919（大正8）年5月1日

※表題は底本では、「蜜柑《みかん》」となっています。

入力：高柳典子

校正：岡山勝美

2012年2月8日作成

2012年3月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蜜柑

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>